大宮まゆっこ新聞

Vol.016
2023年9月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館のご近所さん　麺打ち塾　地粉屋手打ち「駕籠休み（かごやす）」

店主　井島秋三さん

大宮図書館から徒歩約1分。氷川参道から一つ曲がった先の黄色い看板が目を引く店頭には、朝10時の開店前から行列ができる。そんな人気うどん店「駕籠休み」店主の2代目巌鐵（がんてつ）井島秋三（いじましゅうぞう）さんにお話しをうかがった。

「駕籠休み」は元はスーパーを経営していた店主が、同じ場所で16年前に創業した。麺は全て手打ちのため1日に提供できるのが200食に限られており、営業終了の15時を待たずにいつも売り切れてしまう。埼玉県にはうどん店が多く存在するが（生産量はあの香川県に次いで全国2位になったこともあるくらいだ）、大行列に並んでまでも食べたくなる秘密は一体なんだろうか。

こだわりは「水・粉・技術」の3つで、その中でも最も重要である水は、寄居町（よりいまち）の日本水（やまとみず）を毎週汲みに行く。埼玉県唯一の名水百選に選ばれているこの水を用いることで、うどんも出汁もよいものができるのだ。試飲させていただくと、水道水のような雑味がなく、すっと体に染み込んでいくように感じた。

粉は北海道・岩手・群馬・埼玉・長野の地粉を2週間ごとに使い分けている。国内産の地粉にこだわる理由は小麦の薄皮にあり、外国産の粉では除かれているこの薄皮によって、うま味や香りが増す。

うどんを打つときは、いかに熱を通さないかというところに技術が必要で、前身のスーパーを経営していた時期、営業後に研究を重ね失敗を繰り返しながら、この技術を独学で習得した。粉によって打ち方を調整したり、新しい麺を開発したりできるのも、この時期に学んだことの応用のおかげだ。

味だけでなく、店内にも信念を感じることができる。所狭しと貼られた手書きのメニューの中には丼物もあり、それらの値段が安い。安すぎる。原価が提供価格を上回ってしまうのではないかと驚いていると、「お客さんに喜んでもらわないと」と店主は言いながら微笑む。その心は毎月行う値引きセールや、雨の日に配るクーポンにも表れている。また、お客さんの好みに合わせてつゆの味の調節にも対応する。スーパー経営以前にしていた野菜の引き売りでも行列が絶えなかったそうだが、その秘訣も現在に通じるものがあるのだ。

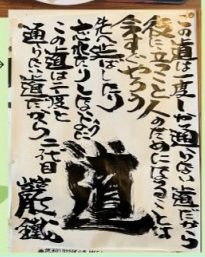
8月の平日、行列に並んでみた。酷暑の中でも行列は絶えない。おすすめされた「豪麺（ゴーメン）」を注文してみる。かつお節の香るスープは昆布・煮干し・豚骨・鶏ガラ等をブレンドしており、確かに複雑で奥深い味わいがある。麺は黄色味を帯びており、モチモチとした歯ごたえの中にコシが感じられる。国産地粉をブレンドした〝応用〟が効いているのだ。まさに初めてのうどん体験。

手書きのメニューに紛れて様々な格言が貼られている。「道」と題された格言には店主の経営に対するすべてが表れているように感じた。

他店との差別化を図り、そのうえで来てくれるお客さんに儲けさせる。駕籠休みはうどんの枠には収まらないオリジナルな店主のいる店である。

麺打ち塾　地粉屋手打ち駕籠休み
【住　所】さいたま市大宮区吉敷町2-108-12
【電　話】048-644-1586
【営業時間】10時～15時
【定 休 日】不定休

↑豪麺（ゴーメン）


味のある字体→

うどん本

うどん大好き埼玉県民(?)の皆さんに読んでいただきたい本をご紹介します！

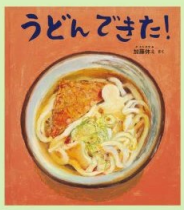
『スゴい！埼玉うどん王国宣言！！
―全国のみなさまこれが令和の新常識です！―』
永谷晶久／著　大空出版　2019年

埼玉を日本一の「うどん県」にする会の会長で東京大学うどん部名誉顧問である著者が埼玉うどんの魅力と名店を教えてくれます。

『愛と情熱の山田うどん
―まったく天下をねらわない地方豪族チェーンの研究―』
北尾トロ・えのきどいちろう／著　河出文庫　2022年

かかしのマークが目印の県民のソウルフード｢山田うどん｣を大の大人２人が真面目に考察します。

『うどんできた！』
加藤休ミ／著　福音館書店　2020年



こねて、踏んで、寝かせて、伸ばして！
見ているうちに自分でもうどんを作ってみたくなる絵本です。

ゆかりの文学コーナー

『北沢楽天　日本で初めての漫画家』

北沢楽天（きたざわらくてん）本名北沢保次（きたざわやすじ）は、1876年に大宮宿脇本陣（おおみやしゅくわきほんじん）・紀州鷹場本陣（きしゅうたかばほんじん）を代々務めた旧家 北沢家の四男として、東京神田駿河台に生まれました。

北沢家の祖先は、前号の「まゆっこ新聞」に出てきた「寿能城（じゅのうじょう）」の筆頭家老を務めましたが、落城の後の1606年、郡代「伊奈忠次（いなただつぐ）」から城跡を北沢家屋敷とすること、また周辺田畑を開発するように命じられ、一帯を「寿能村」と名付けました。その後、屋敷は氷川参道周辺から、現在の「大宮高島屋」周辺へと移っています。そのため、「大宮高島屋」の屋上には「北沢稲荷」が祀られています。

楽天は少年時代に洋画を学んだあと、外国人向けの新聞を発行している「ポックス・オブ・キュリオス社」に採用され、漫画家としてのスタートを切りました。やがて彼の絵は、福沢諭吉親子の目に留まり、諭吉が創刊した「時事新報」に入社します。当時、風刺画は「ポンチ絵」と呼ばれていました。その後は、自由に絵を描きたいという希望から、日本初のカラー漫画雑誌「東京パック」を創刊しています。創刊号の表紙である「露帝噬臍の悔（ろていぜいさいのくひ）」は、皆さまも1回は見たことがあるかと思います。

1929年から約1年間、楽天は世界旅行に出かけました。パリ滞在中は展覧会に出たり、画家・藤田嗣治のアトリエの教室に通ったりしていたそうです。また、ロンドンで個展も開催しています。

帰国後は、新人漫画家の養成のため、東京に楽天漫画スタジオを開設しています。晩年の72歳からは、先祖代々の土地大宮に「楽天居」を構え暮らしていました。

1955年に亡くなった楽天は、北沢家累々の墓所大宮山東光寺に葬られました。「楽天居」は大宮市に寄贈され、現在の漫画会館となっています。会館入口左側にはアトリエが保存されています。大宮公園からも近いので図書館から氷川神社をぬけて、ぶらぶら歩いてみるのはいかがでしょうか？

東光寺　楽天の墓所

参考資料
『北沢楽天－日本で初めての漫画家－』
北沢楽天顕彰会／編著　さきたま出版会　2019年
『楽天』　北沢楽天／著　北沢楽天顕彰会　1980年

大西民子の一首

自画像の頬をこの夜もそぎゐつつ
極道と呼ぶ生き方に似む
『風水』より

晩年の民子は、これまでの人生について他の一切を捨てて短歌に命をかけてきたと言っています。鏡に映る頬のこけた自分の顔を見た民子は、まるで極道者のようだと感じたそうです。

書庫の本　お持ちます

大宮図書館
ホームページ

大宮図書館
X(旧Twitter)

X(旧Twitter)ではイベントやスタディコーナーの持ち人数など大宮図書館の情報を日々つぶやいています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。

「読書とゲームとその外側」

職業柄、読書は好きだ。けれど、他にも好きなことがある。コンピュータゲームだ。

最近のマイブームは歴史シミュレーションゲーム。「三国志」を題材にしたものを遊んでいる。一人の君主になり国を経営し、他国との戦争・外交によって中華統一を目指す内容だ。ゲームに登場する武将たちには、一人一人名前がある。それは歴史上実在した人物であったりフィクションの三国志～『三国志演義』～に登場する人物であったりする。そうやって遊んでいると、ふと疑問が浮かぶ。この武将たちは歴史上やあるいは創作の中でどのような人物だったのだろうか？

気になって『三国志演義』を手に取ってみる。古典ではあるが、ゲームの知識があるのですんなりと物語に入ることができる。血沸き肉躍る英雄たちの生き様。ゲームに劣らない熱い物語が繰り広げられている。また、歴史書の『三国志』にも手を伸ばしてみる。物語の『三国志演義』とはまた違った表情の人々の姿がそこにはある。

そうしていくつかの資料を読み終わった後で、再びゲームの『三国志』に向かう。そうすると、それまで駒に過ぎなかった武将たちが、それぞれの物語を持って立ち現れてくる。ゲームが読書をいざない、読書がゲームを豊かにする。二つの世界を行き来するのだ。

これは別に歴史に限られたことではない。読書もゲームも本来狭い世界に閉じこもる趣味ではないのだ。その中で得た経験は別の世界に私たちを導いてくれる。

ゲームの話をもう一つ。宮部みゆきの『ICO－霧の城－』という小説がある。特別な境遇の下に生まれた少年イコが、自らの運命と対峙すべく「霧の城」と呼ばれる古城を冒険する物語だ。これは同名のコンピュータゲームをノベライズしたもので、私はまだこのゲームで遊んだことがない。しかし、小説の世界で目にした、暗く厳しく、強く美しい物語はとても印象に残っていて、いつかゲームも遊んでみたいと思っている。そして、イコの体験した世界を自らも「体験」したい、と強く焦がれているのだ。

私はゲームが好きだ。そして、読書も好きだ。二つの世界はつながっている。そしてそれぞれの世界が、さらに外のまだ見ぬ世界へと広がっている。読んでも読みつくせない、遊んでも遊びつくせない、そんな世界が広がっている。

参考資料　『三国志演義 1』
羅貫中／作　井波律子／訳　筑摩書房　2002年
『正史三国志 1』
陳寿／著　裴松之／注　筑摩書房　1992年
『ICO－霧の城－』
宮部みゆき／著　講談社　2004年

まわれ！円盤

EARTH,WIND&FIRE SUPERHITS

皆さんはこの秋、どのようにお過ごしですか？私は、読書の秋！と言いたいところですが、この夏に激増してしまった体重を減らすべく、スポーツの秋にしたいと思います！

このスペースでは、私がウォーキングや筋トレ中に、BGMとして愛聴しているEarth,Wind & Fireの『September』について紹介したいと思います。

Earth,Wind & Fireの代表曲の一つであるこの曲は、1978年に発表されました。日本でも人気が高く、発表から45年経った現在でも、テレビやラジオ等さまざまな場所で耳にする曲ではないでしょうか。夜の博物館を舞台にした映画のエンディング曲と言ったらピンとくる人もいるかもしれませんね。

この曲、題名こそ9月ですが、実は12月の曲なんです！洋楽を聴くとき、歌詞の内容を意識せずに聞いてしまうので、このことを知ったときはなかなか衝撃的でした。

『September』の収録されたアルバム『EARTH, WIND＆FIRE　SUPERHITS』の解説書には歌詞だけでなく、和訳も載っていますので、歌詞の内容が気になった方はぜひ確認してみてください。このCDには他にもノリが良く、楽しい曲がたくさん収録されています。ジョギングやウォーキング等、運動のお供にオススメです。

『スーパー・ヒッツ』
アース・ウインド＆ファイアー／演奏
ソニー・ミュージックエンタテインメント　2000年

歴史部　歴史メシのススメ？

掃除に洗濯といろいろある家事の中で、私は「料理」が一番好きだ。ここ最近、古いレシピに興味を持つようになり、今回この記事を書くために調べてみることにした。昔の料理というと、なんとなくおいしくなさそう……と思っていたが意外や意外、素材の味を生かしたおいしそうなものも多くあるのだ。

最初に目を引いたのは、古代メソポタミア料理。「古代小麦とラム肉のシチュー」うーん、文字だけでもすでにおいしそう！ラム肉の癖が嫌いという人も多いが、昔からよくジンギスカンを食べていた私は大好物なのだ。なにより、この時代にもう「野菜だし」が発明されていたことにも驚いた。なぜ、私は長年昔の料理＝マズいと思ってしまっていたのだろう……と考えている内にふと思い出した。社会科の資料集で見た、縄文時代の料理見本はみんな「茶色」なのだ。

そこで、もう一度日本の料理史の本も見てみることにした。写真が載っているだろうという理由で、児童書を探したところ、早速いい本を発見。ただ何故だろう、改めて見るとマズそうには見えない。この時代の人たちにこんなこと言ったら怒られるだろうが、平安時代の庶民が食べていたという強飯（こわいい）に野菜の煮物、鮎の焼物なんてむしろ絢爛豪華なお貴族様の食事より断然おいしそうに見える（たぶん、学生時代の私は毎日ラーメンと唐揚げでもいいと思っていたからなのだろう）。特においしそうなのが江戸時代の料理だ。いわゆる「レシピ本」も出回っていて、浅野高造（あさのこうぞう）なる人物が書いた『素人包丁』は、今でいう手抜き時短料理本だったようだ。紹介されていた「蕪の風呂吹き」なんかは、これと似たものをむかし作ってもらったような記憶がある。

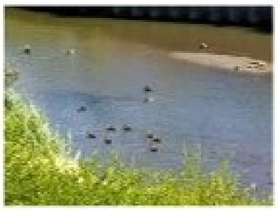
なお、料理をするともれなくついてくるのが片付け。「本当の料理上手は片付け上手」と祖母から言われてきたが、もっと要領良く片付けもしようと反省している。

現代で手に入る食材で再現調理をしてみました！
左・古代小麦とラム肉のシチュー　右・蕪の風呂吹き

参考資料
『歴メシ！－世界の歴史料理をおいしく食べる－』
遠藤雅司／著　柏書房　2017年
『タテ割り日本史－アクティブラーニング対応－1　食べ物の日本史』
講談社／編　講談社　2020年
『江戸の食卓に学ぶ－江戸庶民の"美味しすぎる"知恵－』
車浮代／著　ワニ・プラス　2015年

大宮20景

鴨川の流れ、土手の桜と三橋の田んぼ



桶川・上尾から朝霞に向かって流れる鴨川は、春の桜が見ものですが、秋になると付近の水田が稲穂を実らせて一面黄金に輝く姿に心を打たれます。

おおみや読書バトン

第11回　テーマ『青春』

「青春」を辞書で引くと、①夢と希望に満ち、活力に溢れた若い時代。②季節の「春」を示す言葉、とある。

ののはな通信は、そんな時代に出会った**ののとはな**の往復書簡が綴られている。クールで辛辣な**のの**と、天真爛漫で甘え上手な**はな**。ミッション系の女子校で出会った二人は、性格こそ正反対だが親友同士だ。始めの章では、話題の漫画の展開や世の中の事件、家族のことをお互い毎日手紙に記して送り合う。そして次第に惹かれていき、恋に落ちるのだが、**のの**のとある裏切りによって二人の関係には亀裂が入り、手紙のやりとりはいちど絶たれてしまう。その後も再会と別れを繰り返し、時代の流れに伴って手紙からメールへと変わっていった二人の往復書簡は、再び手紙へと戻って物語を終える。

その最後を、春のようだな、と思う。自分を取り巻く環境が変わり、互いを思う気持ちも春から夏を経て秋そして冬へと巡っていくけれど、また春へと戻ってきたような感想を抱いた。

文庫版には、小説家の辻村深月さんの解説が収録されており「理解し、裏切られ、傷つけ、けれど大好きだから何度も惹かれ合う。相手のことを思い、新しく何度も繋がり直す**ののとはな**の関係は、私たちが通ってきた道であり、通ることができなかった道だ」と語っている。

この本を読み終わった後、多くの人がそんな道の途中で出会った"誰か"を思い浮かべたのではないだろうか。そういう誰かと共に在った、あるいは共に在る時代こそ、その人における青春ではないだろうか。

ののとはなのような恋や運命と呼べる関係ではなくても、もう二度と会うことはなくても、ふと思い出してしあわせな春を願うような人と在った時代を思い出しながら、私も久しぶりに、あの頃の友人たちとの往復書簡を再開しようと思う。

ということで、次回のテーマは「手紙」です。

紹介した本
『ののはな通信』
三浦しをん／著
KADOKAWA　2018年
紹介者：麦茶